
 話 題

世界最初の開腹手術のこと

杉 谷 章

Sabiston Jr. の調査によると、世界最初の計画された開腹手術の成功例は1809年12月27日に Ephraim McDowell により行われた卵巣嚢腫摘出術であった。(Sabiston Jr. DC ; Major Contribution to surgery from the south. Ann Surg 181 : 487-507, 1975.)

McDowell は米国ケンタッキーのダンビル (Danville) で内科外科を標榜して開業していた医師である。1809年といえば、リンカーンが生れた年で、南北戦争の約50年前である。これは日本では江戸時代の文化6年、第9代将軍家斉公の治世にあたる。その頃華岡青州の名が高まり、紀州の殿様が彼を招聘している。明治維新の55年前である。

ロングがエーテル麻酔を初めて行ったのが1841年、リスターの制腐法が1867年、ビルロートの最初の胃切除が1881年である。それよりずっと前であるから、この手術をアメリカの片田舎で1人で行った McDowell という人は、相当に勇敢で、しかも腕の立つ人であったにちがいない。実際、彼のポートレイトを見ると、やせていて、額が広く髪を一寸前にたらし、唇は薄く、顎がしゃくれて、凹型の顔で一見、ドラキュラ男爵に似ている。

McDowell はこの症例を1817年に発表したのが、Sabiston Jr. の文献により、以下この手術の有様を紹介する。

患者は Jane Todd Crawford 夫人、ダンビルから60マイル離れたところに住んでいた。夫人は腹部膨満を来し、はじめは妊娠と思ったが、おかしいので McDowell の往診を頼んだ。McDowell によると『こんな巨大なものを摘出したのを、いままで見たことはない。又、その様な手術を企わだてたとも、又成功したとも聞いたことがない。——と、この不幸な女性に言わざるを得なかった。ところが彼女は、それでもためしてみてもほしいと思っているらしかったので、もしダンビルまで来てくれたら、手術してあげる、と約束した。』とある。その時の彼の心の中は僕にもよくわかる。むつかしい症例を、うっかりひきうけてしまって、困ったという気持ちと、俺ならきつと出来るという自信。外科医なら皆胸におぼえがあるであろう。

彼自身の記載によると、『Crawford 夫人は馬にさせられて、60マイル離れた自宅から、ダンビルまで、数日間かけてやって来た。』そうである。命がけの、荒野の旅だったろう。

彼の手術記録をそのまま紹介する。『私の甥で、同業の James McDowell 医師を助手にして手術したが、以下の如くに行った。普通の高さのテーブルに、彼女を仰臥位にして、どうせ手術の邪魔にしかならぬから、着衣を全部とって、裸にした。腹直筋より左側3インチの部に、それに平行に9インチの切開を行い腹腔に達した。^(註1)此の部の腹壁は著明に挫滅されていた。これは馬に乗っ

AKIRA SUGITANI : First Successful Case of Intentional Laparotomy.

Chief, Surgery, Shizuoka Rosai Hospital, Hamamatsu, 430, Japan.

Key words : Labarotomy, Ovarial cyst.

索引語 : 開腹手術, 卵巣嚢腫.

て来る途中、鞍の角 (horn) に腫瘤を支えていた為と思われる。腫瘤はよく視野に入ったが、大きすぎて、全部を取出すことは出来なかった。そこで子宮の近くで、卵管を丈夫な糸で結紮し、腫瘤を切開した。此の腫瘤は、卵巣と卵管采部が巨大に腫張したものであった。汚いゲラチン様の物質15ポンドを除去し、卵管を切断し、嚢を摘出した。これは7ポンド半あった。開腹するや、直ちに腸管がテーブルの上にとび出して来た。腹腔は完全に腫瘤で充塞されていて、術中腸管を還納することは不可能であった。

以上の操作は約25分で終わった。そこで、吾々は彼女を左側に横にして、腹腔内の血液を流し出し、開腹創は結節縫合で閉じ、その下端から、卵管を結紮した糸を外に出しておいた。^(註2) 結節縫合の間に各々絆創膏をはって、固定を完全にして、かつ切開創の治癒を促進することとした。吾々はその後、型の如く包帯を施し、ベッドに移し、^(註3) 完全なる処方による解熱剤を与えた。』

この手術は、もちろん無麻酔であった。あとで、孫が聞いたところ、夫人は「手術中、私はずっと聖書の詩篇 (Psalms) を読んでいたのだよ。」と言ったということである。関羽が、切開手術を受けている間、碁を打って、平然としていたという、彼の豪傑ぶりを語る伝説がある。Crawford 夫人のこともあるから、あるいは、この話も本当だったのかもしれない。

術後経過は『5日目、彼女を見舞ったら、彼女は自分でベッドメイキングをしていた。私は本当にびっくりした。25日目に、十分気をつける様にいって、彼女を家に帰した。来た時と同様馬で帰ったが、以後ずっと健康に暮している。』実際、夫人は、元気に79才まで生きたそうである。

なお、当時のアメリカの医師を知る参考に、彼の略歴を述べると；1771年バージニア、オーガスタ郡 (Augusta County) で生れる。父は、独立戦争の時、ウィリアムズバーグの会談 (The Convention) にオーガスタ代表に選ばれている。15才で神学校に入り、その後エジンバラ大学に留学、医学を修め、24才で帰国、ダンビルで開業した。ダンビルは150軒ほどの民家がある町で、患者は町を中心に50マイルの範囲から来た。往診は馬で、ほとんど道のない所に行くので常であった。1809年、開業14年目、38才の時に、この有名な手術を行った。1817年、卵巣摘出術に関して、上記の第1例も含めて3例を初めて発表した。(McDowell, E. : Three Cases of Extirpation of Diseased Ovaria. Electric Repertory and Analytical Review, 7 : 242, 1817) 1825年メリーランド大学より名誉学位を受ける。1830年59才で死亡。彼は一生の間に、この種の卵巣摘除術を11例行い、10例成功した。

筆者註；1) 傍腹直筋切開のことだろうが、現在の様に各層毎に切開して、止血するのではなく、一気に筋肉まで切って止血はしなかった。当時のケンタッキーに止血鉗子があったはずがない。1889年 Halsted がスイスの Kocher の手術を見学して、その時初めて、止血鉗子をたくさん使って出血点をていねいに、止血する手術を見た。Halsted は直ちに、所謂コツヘル鉗子を注文して、アメリカに持ち帰ったのである。(Rutkow IM ; William Halsted Theodor Kocher, An Exquisite Friendship. Ann Surg 188 : 630-637, 1978.)

；(2) 腹腔内に異物を残さない用心である。

；(3) 創の化膿を防止する為である。当時の考え方によると、化膿するから発熱するのではなく、術後の発熱がつづくと創が化膿をおこす。

；(4) Sabiston Jr. は、この手術が、無麻酔であったこと、わずか25分で終了したこと、第1例目から成功したこと、ベルリンではなくアメリカの片田舎で行われたことを特筆すべき点として感心している。